

国宝・姫路城「平成の保存修理工事」 ～次の世代へつなぐ～

当社JVは、2009年6月から国宝・姫路城の大天守保存修理工事を担当してまいりましたが、このたび完成し、2015年3月27日にグランドオープンしました。

築城から400年以上の歳月を重ね、日本で初めて世界文化遺産に登録された国宝・姫路城。この貴重な史跡を後世に残すために、1956年に初めて大天守を全面解体し、再築する「昭和の大修理」が行われ、当社は風雨から城を護る素屋根（すやね）工事を担当しました。

それから45年が経過し、漆喰壁や上層部の軒、庇に傷みや汚れが目立ってきたことから「平成の保存修理工事」が計画され、当社は



昭和の大修理と同様に素屋根工事に着手。昭和の素屋根が丸太造りだったのに対し、今回は三次元データで図面を作成するなど最新技術を駆使し、鉄骨で構築しました。

平成の保存修理工事のメインとなったのは、瓦工事。7万5,000枚の瓦に番付けしてから取り外し、反りや歪み、割れなどを確認しました。その後、清掃・選別が行われ、奈良や姫路の瓦専門工場で不足・不良分の瓦1万6,000枚が新たに制作されました。

漆喰は、石灰と糊などを混ぜ合わせる壁塗材で、壁の上塗りのほか、瓦の目地などにも使われました。大天守の上層部は、土壁から作り直され、塗厚や塗重の回数を

調査し、そのほかの各層も傷みの目立つ部分を中心に塗替え作業が行われました。使用される機会が減少している消石灰（しょうせっかい）や貝灰（かいばい）、海藻糊（かいそうのり）、晒（さら）しスサなどの主材料については、古文書を参考にしながら昭和の大修理の配合で練り上げました。

平成の保存修理の最大の難関は、「素屋根」の構築。大天守を風雨から護るため、城に工事用の足場を巡らせ、大天守を覆う素屋根と呼ばれる巨大な仮設建物を構築しました。その規模は、鉄骨造、地上8階建てで高さは約52m。姫路城は特別史跡のため杭は打てず、総重量約1,730tにおよぶ鉄骨を基礎コンクリート約3,080tと砕石720tが支えました。保存修理を終えると、大天守を一切傷つけることのできない緊張感の中、慎重に素屋根の解体作業が進められ、平成の世に美しい白鷺の姿がふたたび現れました。



グランドオープンを控えた2015年3月26日、完成記念式典が現地で行われ、会場は祝福の雰囲気にも包まれました。これからも市民や多くの人々に愛される姫路城は、姫路のまちを見守り続けていきます。